

物語を〈情報伝達のモデル〉にしたスピーチの指導

—教材「ずうっと ずっと 大すきだよ」から〈ありがとうスピーチ〉へ (小学3年生) —

佐藤 洋一 (愛知教育大学 国語教育講座) 伊藤 清英 (刈谷市立東刈谷小学校教諭)
(2003年11月26日受理)

Teaching pupils how to give their speeches using some story as a model of communication

—To make speech of thanks reading the story: *I'll Always Love You*.
(A teaching material for pupils in the third grade at elementary schools.)—

Yoichi SATO (Department of Japanese Languages, Aichi University of Education)
Kiyohide ITO (Higasikariya elementary school, Kariya)

要約 国語科におけるコミュニケーション能力育成の課題の一つは、身につけさせるべき「国語学力」の明確化(系統的な学力保障)と、それと結びついた人間性・社会性の育成を図る「学習システム=授業・評価システム」の開発と提案である。「確かな学力」の定着は、基礎・基本の繰り返しやスキルの一覧表の提案のみでは、真に子どもたちの「生きる力」の育成とはなりにくい。授業提案と評価研究レベルで、「確かな学力」の育成が「豊かな人間性・社会性の育成」にリンクするような、到達目標(評価基準)の明確化・系統的で段階的な「授業・評価システム」が緊急に求められている。

本稿は、到達目標(評価基準)を明確にしたコミュニケーション学習と評価研究の一環として、文学教材(ここでは物語教材)を〈情報理解から発信の一モデル〉としてとらえなおし、「話す・聞く/関わり学び合う」というスピーチの交流と評価学習へと結びつけた実践的な提案である。

Keywords: 到達目標(評価基準) 情報伝達のモデル コミュニケーション ありがとうスピーチ

1. はじめに —物語の授業と「伝え合う力」—

「子どもたちは物語を読むのは好きだが、物語の授業は好きでない」という報告をよく聞く。これは、一つの主題や登場人物固有の心情・生き方を全員で追究させた、これまでの狭い教材観に基づいた授業方法が、子どもたちの学習意欲と一致していなかったことを端的に表している。これからの物語の学習は、子どもたちの〈生な現実〉と結びつけ、学ぶ必要や喜びを感じ、確かな学力を保障する授業に変えていく必要がある。

そのためには、物語も、説明文同様に教室の外で生きる言語技術やコミュニケーションの〈一つのモデル〉として示し、活用できるように指導していくべきである。具体的には、物語のなかから、言語技術やコミュニケーション能力育成のための学び方や表現技術の観点を抽出し、発達段階に応じて「到達目標(評価基準)」として系統的に整理して、自己評価できるように示しながら指導を進めることが重要である。

2. 「伝え合う力」育成の実践的な課題

(1) 「到達目標(評価基準)」を明確にした指導と評価

これまで国語科では、単元の初めに子どもたち自身が学習すべき問題に気づくのを、じっくりと待つ指導

が多く見られた。しかし、国語科では、すべての子どもが、学習すべき価値のある問題に自分から気づくようなことはない。結局は教師が学級全体の問題として広げていた。その問題も、文章の内容・テーマに関するものだけになってしまい、国語科学習の中核にすえるべき「評価基準としての言語技術」に目が向くことはほとんどなかった。学習指導要領が改訂され、指導時間数が削減された現在では、そのような漠然とした指導に時間と労力をかけることはできない。

さらに、子どもの気づきに頼ってはいは、その単元でねらうべき到達目標が不明確、不確定になり、次の学年の学習を見通した系統的な指導にならない。「目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)」が導入された現在、学校の結果責任を果たす上でも、到達目標の価値や妥当性、系統性を子どもに任せるわけにはいかない。

これからの国語科学習指導は、発達段階に応じて「到達目標(評価基準)」として整理して、系統的に指導しなくてはならない(資料1)。また、その「到達目標(評価基準)」を、教師の責任において、単元のできるだけ早い段階で子どもたちに明示して、それに基づいて自己評価させながら指導を進めるべきである。そうすることによって、子どもたちの自己評価能

力・自己学習能力も、効果的に高められるからである。

(2)「読む」「書く」と関連させた、論理的で個性的な「伝え合う力」を身につけさせる指導

「伝え合う力」の指導という、これまでは声の大きさや話す速さといった音声化や、スピーチ発表会、パネルディスカッションといった発表・交流の形式のみに重点が置かれてきた。

しかし、本当の意味で「伝え合う力」を高めるためには、「読むこと」による内容の学習や、「書くこと」による論理的な構成や推敲の学習などと関連させて、段階的に指導する必要がある。そうすることで初めて、論理的で個性的な「伝え合う力」が高まっていくからである。

本実践では、物語のなかから、指導すべき言語技術やコミュニケーション能力育成のための学び方や評価のポイントを抽出して示し、それを「話すこと・聞くこと」につなげるために、5段階の学習過程を構想して指導をした。(注)

(3)コミュニケーションへの基本的な態度の指導

現在、少年による非行や犯罪が、社会的問題になっている。問題を起こす少年たちに足りないものは「感謝の心」「相手の気持ちを思いやること」だと断言する専門家もいる。また、ひきこもり、地域社会における人間関係の希薄化など、多くの問題が山積している現在、国語科で「コミュニケーション」に対する積極的な態度を、子どもたちに具体的な学力として身につけさせていくことは、学習指導要領のレベルを超えた、緊急の社会的要請でもある。

本実践で、物語を〈モデル〉教材にすえたのは、物語の「学び方・評価」リテラシーをシンプルに指導するとともに、教材の魅力を生かし、「共感」「感謝」「自尊感情」というコミュニケーションの基本を実感させたいというねらいを含んでいる。

3. 実践の概要

(1)対象児童 小学校3年生 1学級 32名

(2)児童の実態

明るく活発な児童が多いが、文章作成などの面倒なことはやりたがらない。学習のまとめでは、事実と意見を区別した文章が書けず、学習が十分深まらない児童も多い。国語科学習の方法を身につけさせながら、達成感を味わわせる指導をくり返す必要がある。

また、あいさつやお礼などのコミュニケーションの習慣が、まだ十分身につけていない。スピーチの学習のなかで、積極的なコミュニケーションの態度と方法を身につけさせ、感謝や共感の気持ちを目的や相手、場面に応じて表現することの大切さと喜びに気づかせたい。

(3)指導目標

①コミュニケーションによって積極的に人間関係をつくる喜びとその大切さに気づくことができる。

→情報伝達への積極的な態度〈コミュニケーション

の基本)

②具体例や構成を工夫しながら、論理的なスピーチ原稿を作成することができる。

→情報の選択・構成〈「論理的な構成」の基本)

③資料を活用しながら、友達にわかりやすく楽しいスピーチをすることができる。

→情報伝達の基本と個性化〈説明技術・説得力)

④友達のスピーチ内容を正確に聞き取ることができる。

→情報の理解〈キーワードの把握)

⑤スピーチの評価の観点を理解し、友達のスピーチに質問や感想をもつことができる。

→情報活用の自己評価能力〈メタ評価能力)

(4)実践計画 (12時間完了)

「伝え合う力」と自己評価能力を効果的に高めるための「5段階の学習過程」

学習段階	国語科としての学習活動
1 導入・基礎学習 (2時間)	学習のめあて(評価基準)を知る。学習に関心をもつ。教材文を音読する。
2 基本学習 (3時間)	スピーチの基本を知る。 ・エピソードの選択・配列 ・コミュニケーションへの積極的な態度 ・人間の成長とそのきっかけ
3 応用・個性化学習 (3時間)	各自でスピーチを構成する。 ・感謝の対象とエピソードの選択 ・エピソードの配列と全体の構成 ・資料の作成
4 発信・交流学習 (3.5時間)	スピーチを発表し、交流する。 ・モデルスピーチの視聴 ・グループに分かれてのリハーサル ・全体への発表 ・発表への質問と評価、自己評価
5 評価・一般化学習 (0.5時間)	学習全体を自己評価する。学習内容をこれからの生活に生かせるように一般化する。

4. 国語科学習指導案 —資料2—

5. 指導の実際

(1)学習段階1—「導入・基礎学習」(第1, 2時)—

①学習のめあてを知る。

単元の初めに、児童全員に「自分にとって一番大切な人やものって何だろう」と考えさせた。そして、

資料 1

「聞く・話す」学力の評価基準と系統性

—「到達目標（評価基準）」としての言語技術の立場から—

2003.6 作成 佐藤洋一

1 「聞く学力」の評価基準—楽しく・論理的に、そして豊かに—

関心・意欲・態度—I～IVの「基礎学習」～「発展学習」の各学習段階で表れる—

- 1, 学習習慣・態度レベル……………学習内容や方法への意欲や習慣、態度の形成、定着等
- 2, 自尊感情・自己認識レベル……………自分をどう認識しているか、伝える・聞く自信や経験
- 3, 人間関係・他者意識レベル……………他者と関わり、学ぶ経験やその意味のありかた等
- 4, コミュニケーション意識レベル……………話す・聞く・関わる等基礎技術の習得レベル

I 基礎学習の「評価基準」—楽しく、論理的に聞く—

- 1, 連絡や報告等を「聞く」楽しさと必要性、大切さがわかる 【正しく聞く楽しさと意味】
(例, 誤解されたこと, うまく伝わらなかった例とその原因を話し合う等)
- 2, 報告や発表の「一番言いたいこと」がわかる (メモできる) 【二つのキーワードを書く】
(例, 私は～です/主語述語の対応。○○が○○です/話題と判断がキーワード)
- 3, 意見や主張のために選ばれた「具体例 (資料)」がわかる 【具体例のキーワードを書く】
- 4, 自分の考えや一言感想が持てる (初めて知ったこと等) 【関心意欲、自分の考えを持つ】
- 5, その子らしさや上手なところと言える 【他者への関心、情報の発見・長所の指摘】
- 6, 1～5 (例2と4) について振り返り自己評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

II 基本学習の「評価基準」—論理的に、自分の立場から聞く—

- 1, 報告等を「論理的に」聞く大切さと観点がわかる (例2～4) 【「正確」に聞く観点】
- 2, 報告や発表・話し合いの「主張」がわかる (メモできる) 【二つのキーワードを書く】
- 3, 選択・構成された具体例の「数と内容」がわかる 【例と資料の数と内容のキーワード】
- 4, 報告やスピーチに「意見や質問・疑問」が持てる 【自分の考えを持ち、メモできる】
- 5, わかりやすさや説明の工夫の方法、良さがわかる 【効果的な説明技術と方法の理解】
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫等)
- 6, 1～5 (例2～4) について振り返り自己評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

III 発展学習 (応用・個性化学習) —話し合いや関わりの中で論理的に、豊かに聞く—

- 1, 「論理的に」「豊かに」聞く大切さと観点がわかる 【基礎・基本から応用・発展学力へ】
- 2, 報告や発表・話し合いの「主張」がわかる (メモできる) 【二つのキーワードを書く】
- 3, 具体例の「選択」「論理的構成の工夫」がわかる 【「論理的構成」の基本から応用へ】
- 4, 自分の考えや経験・既習事項と比べ意見や質問・疑問が言える 【「関わる」ステップ】
- 5, 説得力のある工夫や方法、発信者の特徴がわかる 【立場と課題意識・説明技術・説得力等】
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫, 立場や着眼点の個性, 主張や考察の価値や普遍性・本質性, 論理的思考力, 批評力等)
- 6, 1～5 について振り返り、自己/相互評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

IV 発展学習—目的や場面・メディアに応じて「豊かに」聞き、発信・批評的学力へ—

- 1, 発信スタイルやメディアの特性に応じて「論理的に・豊かに」聞く大切さと観点がわかる
(例, 討論・ポスターセッション・ディベート等, 新聞・テレビニュース・ドラマ等) 【基礎・基本から発展学力へ】
- 2, 報告や発表・話し合いの「主張」をわかる (メモできる) 【二つのキーワードを書く】
(例, 主張の前提となっている「常識的な考え方」との対比や論点の重要度の判断等)
- 3, 具体例の「選択」「論理的構成の工夫」がわかる 【「論理的構成」の基本から応用へ】
(例, 資料選択の背景にある立場や歴史的理解, 報告者の信念や個性の理解等)
- 4, 自分の考えや経験・既習事項と比べ意見や質問・疑問が言える 【「関わる」ステップ】
(例, 情報の妥当性や虚偽の検討, 批評的視点をもって聞く態度の重視等)
- 5, 説得力のある工夫や方法、発信者の特徴や背景がわかる 【立場と課題意識・説得力等】
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫, 立場や着眼点の個性, 主張や考察の価値や普遍性・本質性, 論理的思考力, 批評力等)
- 6, 1～5 について振り返り、自己/相互評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

2 「話す学力」の評価基準

—「聞く・読む学力」と対応させた基礎・基本指導重視—

関心・意欲・態度—I～IVの「基礎学習」～「発展学習」の各学習段階で表れる—

- 1, 学習習慣・態度レベル……………学習内容や方法への意欲や習慣、態度の形成、定着等
- 2, 自尊感情・自己認識レベル……………自分をどう認識しているか、伝える・聞く自信や経験
- 3, 人間関係・他者意識レベル……………他者と関わり、学ぶ経験やその意味のありかた等
- 4, コミュニケーション意識レベル……………話す・聞く・関わる等基礎技術の習得レベル

I 基礎学習の「評価基準」—楽しく話す、自分の考えを持つ—

- 1, 「話す楽しさ」と正確に伝える必要性、その大切さがわかる 【楽しさ・正しく伝える】
(例, 誤解されたこと, うまく伝わらなかった例とその原因を話し合う等)
- 2, 「言いたいこと」が分かり (考えを持ち) キーワード化できる 【「考え」・キーワード化】
(例, 私は～です/主語述語の対応。○○が○○です/話題と判断がキーワード)
- 3, 目的・場面・相手・時間等の「条件」のポイントが分かる 【相手・場面や目的意識理解】
- 4, 「条件」に合ったはっきりした発音 (口形) や声量で話せる 【発音・発声・声量等】
- 5, 「条件」に合ったよい姿勢と態度で話すことができる 【姿勢・発声/相手意識】
- 6, 1～5 (例1～3) について振り返り自己評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

II 基本学習の「評価基準」—論理的に話す方法、分かりやすさと説得力—

- 1, 報告・説明等「論理的に」話す大切さと方法がわかる 【「論理的に」話す基本の観点】
- 2, 自分の考えを「例・根拠」とともに話すことができる 【「考え」と根拠/論理の基礎】
- 3, 三～四段階の「論理的構成 (組み立て)」の基本がわかる 【「論理的構成」の基本理解】
- 4, わかりやすく話すための「資料」を工夫できる 【目的・条件に応じた資料活用と構成】
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫等)
- 5, 「自分の立場」から効果的な資料や例を選択・判断できる 【情報の収集・選択・判断】
- 6, 1～5 (例1～3) について振り返り自己評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

III 発展学習 (応用・個性化学習) —話し合いや関わりの中で論理的に、豊かに話す—

- 1, 「論理的に」「豊かに」話す大切さと観点がわかる 【基礎・基本から応用・発展へ】
- 2, 「自分の考え」を友達や他の考えと比較して話すことができる 【考えの個性化・対比】
(例, 主張の前提となっている「常識的な考え方」との対比や論点の重要度の判断等)
- 3, 「論理的構成」を工夫し、個性的に話すことができる 【論理的構成の個性化・条件理解】
- 4, 報告や発表に「説得力」を持たせるための観点がわかる 【説得力・自分らしさの表現】
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫, 立場や着眼点の個性, 主張や考察の価値や普遍性・本質性, 論理的思考力, 批評力等)
- 5, 場面や相手・時間等の条件に応じた報告・発表ができる 【「条件」に応じた的確な発信】
- 6, 1～5 について振り返り、自己/相互評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

IV 発展学習—目的や場面・メディアを活用し「豊かに」話し、発信・批評的学力へ—

- 1, 発信スタイルやメディアを活用し、「論理的に・豊かに」話す大切さと観点がわかる
(例, 討論・ポスターセッション・ディベート等, 新聞・テレビニュース・ドラマ等) 【基礎・基本から発展学力へ】
- 2, 「自分の考え」の個性や着眼点の良さ、価値・重要度等がわかる 【考えの価値と個性】
(例, 主張の前提となっている「常識的な考え方」との対比や論点の重要度の判断等)
- 3, 「論理的構成の工夫」で、効果的で説得力のあるプレゼンテーションができる
(例, 資料選択の背景にある立場や歴史的理解, 自分の関心や課題意識・個性との関連) 【「論理的構成」の基本から応用へ】
- 4, 質問や討議の中で、自分の考えと他の考えを比較し、共通性や異質な点、価値ある論点等をすばやく理解することができる
(例, 情報の妥当性や虚偽の検討, 批評的視点をもって聞き、話す態度の重視等) 【豊かに「関わる」ステップ】
- 5, 質問や討議の中で、相手の立場や背景、意見の特質を理解し、重要なものの順で (ナンバリング) 名付け (ラベリング), 説明・補足, 反論, 批評等を行うことができる
(例, 時間の遵守, 相手意識, 構成の工夫, 資料選択と提示の方法, 楽しい工夫, 立場や着眼点の個性, 主張や考察の価値や普遍性・本質性, 論理的思考力, 批評力等)
- 6, 1～5 について振り返り、自己/相互評価できる 【メタ評価能力・到達度チェック】

資料2 国語科学習指導案

物語を〈情報伝達のモデル〉にしたスピーチの指導

—「ずうっと ずっと 大ききだよ」から「ありがとうスピーチ」へ（小学3年生）—

【学習時期】2003年6月3日～6月20日

【立案者】伊藤 清英 【指導者】瀧平 涼子

1 評価基準のポイント

—自己学習力につながる「学び方・評価」リテラシーを育てる—

- ① エルフが死んだときの“ぼく”が「いくらかきもちがらくだった」理由を書くことができたか。
【コミュニケーションの基本】
- ② エピソードを2つ選んで、3段階の論理的な構成でスピーチ原稿を作成できたか。
【「論理的構成」の基本】
- ③ エピソードを表した2枚の「絵」を提示しながら、スピーチすることができたか。 【説明技術・説得力】
- ④ 友達が、「だれ」に感謝しているのかを、聞きとることができたか。 【キーワードの把握】
- ⑤ 「ふりかえりカード」の観点にそって、スピーチを自己評価することができたか。 【メタ評価能力】

2 指導計画（12時間完了）

段階	時	主な学習活動	評価の観点と指導・支援
導入・基礎学習	2時間	1 単元名と学習内容、「学習のめあて」（到達目標）を知る。 2 教材文（全文）を読む。 3 教材文の音読練習をする。	1 学習シート①「学習チェックカード」を配り、それを読ませながら、説明する。 2 指導者が範読する。 3 「音読カード」を与え、音読練習への意欲化をはかる。保護者のチェックも参考に、到達度によっては個別指導で支援する。 学習のめあてをもつことができたか。
		2 教材文（全文）を音読する。 2 学習シート②「物語読み方カード」で、基本的な内容と、自分の興味や疑問を整理する。 3 興味や疑問を発表し合い、教材文への理解を深める。	1 音読の到達度の高い児童を中心に指名する。 2 同時に、「読むこと」の主な到達目標も示す。 3 テーマにつながる疑問や個性的な読みに気づかせながら、「読むこと」への見通しをもたせる。 物語への興味や疑問をもつことができたか。
基本学習	3時間	3 1 状況設定（登場人物、中心人物、舞台）を確認する。 2 教材文を場面ごとに音読しながら、学習シート③「物語の内容を整理しよう」で、あらすじ（場面構成）をつかむ。 3 挿絵を並べ替えながら、あらすじを説明する。	1 中心人物の定義を確認する。 2 学習シート③の挿絵も手がかりにさせながら、キーワードの記入だけで、手早く理解させる。 状況設定とあらすじを理解し、キーワードを正しく記入することができたか。 3 スピーチでの資料操作（思い出の絵の提示）の学習となる。また、到達できなかった児童への支援とする。
		4 1 エルフが死んだときの“ぼく”が「いくらかきもちがらくだった」理由について話し合う。 2 1の話し合いでわかったことをノートにまとめる。 3 「ありがとうスピーチ」で感謝したい人やものを思い浮かべる。	1 第3、第8場面を音読させる。さらに、学習シート③で、“ぼく”と家族の違いに気づかせる。 2 まとめのあとで、積極的にコミュニケーションすることの大切さを、児童たちの問題として意識させる。 「大好き」「いってやった」の2つの言葉を使って、理由をノートにまとめることができたか。
	5	1 学習のめあてを確認する。 2 子犬をいらぬといつたときの、“ぼ	1 中心人物の定義と名前も確認する。 2 第8、第9場面を音読させる。

		く”の気持ちについて話し合う。 3、かわりにエルフのバスケットをあげた“ぼく”の気持ちについて話し合う。	3 第9場面を音読させる。 中心人物の変化（成長）とそのきっかけについて、自分の考えをもつことができたか。
応用・個性化学習	6	1 全文を音読する。 2 「ありがとうスピーチ」で感謝したい人やものを決める。 3 みんなに伝えたい思い出（エピソード）を2つ選び、学習シート④「スピーチ組み立てメモ」の「なか」に記入する。	1 エピソードのまとめ、積極的なコミュニケーションの大切さを確認する。 2 テーマの価値について考えさせる。 3 「はじめ・なか・おわり」の構成とそれぞれの部分の役割と具体例、注意事項などの「書くこと」の到達目標を学習シート④で示す。 感謝の気持ちにつながるエピソードを2つ選んで、文章で表現することができたか。 ☆ 到達できない児童は、まず絵から表現させる。
3時間	7	1 学習シート④「スピーチ組み立てメモ」の「おわり」と「はじめ」に記入する。 2 スピーチ原稿を読み直し、各自で推敲する。	1 それぞれの部分の注意事項を、具体例にそって確認する。 「3段階の論理的な構成」で、スピーチ原稿を作成することができたか。 2 誤字・脱字をなくす、わかりにくい言い方を減らす、の2点を指示する。推敲の間に、到達できない児童を個別指導する。
	8	1 スピーチを楽しく、わかりやすくするための資料として、自分が選んだ2つの思い出を、絵で表現する。	1 絵を出すタイミングを失わないように、スピーチ原稿のなかに目印を記入させる。 絵を2つ作成して、スピーチ原稿に絵を出すタイミングの目印を記入できたか。
発信・交流学习	9	1 指導者のモデルスピーチを視聴する。 2 4人1組のグループにわかれ、スピーチのリハーサルをし、良かったところ、直したいところをアドバイスし合う。	1 学習シート⑤「ふりかえりカード」を与え、「話すこと・聞くこと」の到達目標を示す。 友達のリハーサルに対して、アドバイスをすることができたか。
3.5時間	10	1 学習シート⑤「ふりかえりカード」で学習のめあてを確認する。	1 内容の良さにも目を向けられるように、「書くこと」の主な到達目標も思い出させる。
	11	2 資料（絵）をタイミング良く見せながら、学級全体に向けて「ありがとうスピーチ」を楽しく、わかりやすく発表する。 3 友達がだれ（何）に対して感謝しているか、キーワードを聞き取り、メモする。 4 スピーチへの質問、良かったところをメモし、発表する。 5 「ふりかえりカード」で自己評価する。	2 スピーチを見やすく、児童が集中できるように、学習机の配置を工夫する。 4 児童の発言に対しては、到達目標と照らし合わせて意味づけし、賞賛する。 ①教室の後ろまで聞こえる声で発表できたか。 ②エピソードを表した2枚の「絵」を見せながら、スピーチすることができたか。 ③友達が、「だれ」に感謝しているのかを聞きとることができたか。 ④友達のスピーチへの質問、良かったところを発表することができたか。 ⑤「ふりかえりカード」の観点にそって、話し方・聞き方を自己評価することができたか。
評価・一般化学習	12	1 学習シート①「学習チェックカード」で学習全体をふりかえり、まとめをする。 2 学習を一般化する。	1 できるようになったこと、わかったこと、まだうまくできないことを発表させる。 2 学習したことが、次にどんな場面で生かせるかに気づかせる。
0.5時間			

資料3 学習シート①「学習チェックカード」

(「到達目標としての評価基準」を自覚化し、学習の見通しをもつ)

1 「学習のめあて」を知りましょう。

3年生「ありがとうスピーチ」
学習チェックカード

名前「 」 三年「 」 組「 」 番「 」

聞く		話す		書く		読む	
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
友だちのスピーチを聞いて、しつもんや感そうを言おう。	友だちがスピーチで一番伝えたいことを考えながら聞こう。	絵をタイミングよく出してスピーチをしよう。	教室の後ろまでとどく声の大きさをスピーチをしよう。	「はじめ・なか・おわり」の組み立てでスピーチをつくらう。	思い出を二つ選んで、スピーチをつくらう。	物語のあらすじを、せつ明できるようにしよう。	物語の中で、「だれ」が「どこ」にいるか理かいしよう。
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

2 自分が特にがんばりたいことを決めましょう。

物語のあらすじはとくいだからがんばります。絵をタイミングよく出せるようにがんばります。

3 「学習のめあて」をふりかえりましょう (◎◎◎)

4 できるようになったこと、わかったことをまとめましょう。

友だちがスピーチで一番伝えたいことがよくわかった。絵のタイミングはだいたいよかったです。

5 学習したことが、次にどんな場面で生かせそうか考えましょう。

「はじめ・なか・おわり」は、読書かんそう文のときに書けそう？

「自分にとって一番大切な人やものに向けて『ありがとうスピーチ』をしよう」と、学習の最終的なねらいを説明した。

続いて、単元を通しての主な到達目標を示した学習シート①「学習チェックカード」(資料3)を与えた。学習を進める順に「読む」「書く」「話す」「聞く」と分け、それぞれ中心となる到達目標を2つずつ示し、学級全体で確認した。さらに、一人一人に「自分が特にがんばりたいこと」を書かせることで、意識化を図った。

これによって、学習の迷走を防ぐと同時に、児童の自己評価能力を効果的に高めていくことをねらった。

②学習に関心をもつ。

そのあとで、教材文「ずうっと ずうっと 大すきだよ」(ハンス・ウイルヘルム作、久山太一訳、光村・小1下)の音読に進んだ。

十分に音読したあと、学習シート②「物語読み方カード」(資料省略)を与えた。初めに、登場人物と舞台を各自で書かせたあと、教師の助言で場面分けした。続いて「おもしろいと思った場面とその理由」「ふしぎに思った場面とその理由」「好きな表げん(ことば)」を書かせた。「ふしぎに思った場面とその理由」で、エルフが死んだあと、となりの子が子犬をくれると言ったのに、ぼくがもらわなかったことに注目した児童が5名いた。この疑問を、第5時の「基本学習」で

「ぼくの成長」に気づかせるきっかけに用いた。

さらに、カードの最後に「読むこと」の到達目標である「あらすじの理解」「中心人物の変化ときっかけ」も課題として示しておいた。

この「物語読み方カード」によって、教材文への関心を高めてから、基本学習に進んだ。

(2)学習段階2—「基本学習」(第3～5時) —

この「基本学習」の段階で、「ありがとうスピーチ」の内容の基本を学習させた。

①エピソードの選択・配列の学習

登場人物と舞台を学級全体で確かめたあとで、学習シート③「物語の内容を整理しよう」(資料4)を与えた。この学習シートを使って、初めに物語のエピソードの配列を確かめた。理解を確認するため、教材文の挿絵を拡大して黒板に提示し、子どもたちにそれを並べ替えさせながら場面を順番に説明させた。

挿絵を提示してから場面の説明をするというこの活動は、第8時「応用・個性化学習」でのスピーチ資料の作成と、第9時以降「発信・交流学習」での資料操作につながる学習でもある。

②コミュニケーションへの積極的な態度

ここでの「読むこと」の評価基準は、「エルフが死んだときの『ぼく』が『いくらかきもちがらくだった』理由を書くことができたか」である。これは、その後の「応用・個性化学習」、「発信・交流学習」で必要な

2枚の違う絵に表現できるかどうかで、エピソードが2つ選べたかどうかを自己評価することができた。実際には1つのエピソードしか書いてなかったり、エピソードが多すぎた子どもは、ここで文章を書き直すことができた。

2つのエピソードの文章と絵を書くことができた児童には、さらに「おわり」「はじめ」「題」の順に書き進めるように指示をした。そして、すべてを書き終えてから、各自で推敲させた。

(4)学習段階4—「発信・交流学习」(第9～12時)—

ここで「ありがとうスピーチ」の発表と、質問・意見の交流をさせた。

①教師によるモデルスピーチの大切さ

初めに、学習シート⑤「ふりかえりカード」(資料7)を与えて、スピーチの評価の観点(「話し方」4つ、「聞き方」4つ)を理解させた。そのあとで、指導者がモデルスピーチを行った。スピーチの始め方から、立つ位置、話す速さ、声の大きさ、資料操作(見せ方とタイミング)、段落ごとの間の取り方、スピーチの終わり方まで、子どもたちの目標となるようにスピーチした。そして、そのモデルスピーチを、「ふりかえりカード」の評価の観点にそって子どもたちに評価させた。これは、評価の観点を正確に理解させるためである。

最後に、資料操作だけを改めて取り上げ、見せ方の悪い例、タイミングの悪い例をいくつか見せながら、良い見せ方とタイミングについて、じっくりと考えさせた。

②グループに分かれてのリハーサル

4人1組のグループに分かれて、発表のリハーサルを行った。1人ずつ実際にスピーチを発表して、それに対して3人の聞き手が質問したり、「ふりかえりカード」の評価の観点にそって良い点や直すべき点をアドバイスしたりする場とした。

評価基準「友達のスピーチへの質問、良かったところを発表することができたか」については、このリハーサルのなかで全員到達することができた。

③全体への発表と交流

「ありがとうスピーチ発表会」として、1人ずつ学級全体の前に出て、スピーチを発表した。

「応用・個性化学習」によってスピーチの内容に自信がもてていて、さらに前時のグループでのリハーサルで発表の仕方も向上しているため、多くの児童が自信を持って堂々と発表することができた。

「話し方・聞き方」の自己評価と、友だちが発表したスピーチについてのキーワードの聞き取りと評価は、前時の学習(教師によるモデルスピーチの視聴とグループでのリハーサル)で使った「ふりかえりカード」で行わせた。

子どもたちが、友だちのスピーチの「なかみ・話し

方の良さ」として書いた内容は、単に音声面の指摘にとどまらず、「海で3メートルくらいの大波がきてでんぐり返ししたというところが良かった」とか、「お母さんのやさしさがよくわかった」「妹のことを大切に思っていてよい」などといった内容の良さにまで及んでいた。もちろん、質問や感想の交流も活発に行われ、「ありがとうスピーチ発表会」はたいへん楽しいものになった。

「ありがとうスピーチ発表会」のあと、「評価・一般化学習」を行った。具体的には、「導入・基礎学習」で示したものと同一「学習チェックカード」(資料3)を使って、主な到達目標について自己評価させながら、学習全体を振り返らせた。そして、「できるようになったこと・わかったこと」と「学習したことが次にどんな場面で生かせそうか」を書かせることで、学習内容を一般化して単元を終えた。

6. 考察

(1)「到達目標(評価基準)」を明確にした授業づくりの意味

「到達目標(評価基準)」を明確にしたことで、少ない授業時間数で、予定した指導事項をもれなく学習することができた。

また、単元の最初と最後で主な到達目標を確かめさせた「学習チェックカード」,「応用・個性化学習」から「発信・交流学习」の5時間以上にわたって手元に置かせた「スピーチ組み立てメモ」,「発信・交流学习」の4時間を通して使い続けた「ふりかえりカード」などの学習シートによって、どの子どもも、到達目標が「学習のめあてと評価の観点」としてはっきりと理解できていた。そして、それをクリアしようと意欲的に活動することができた。

さらに、自分は何を学習したのか、学習の観点をはっきりと言葉で理解することができ、自己学習能力につながる「メタ評価能力」を効果的に高めることができた。

(2)「5段階の学習過程」の意味

「導入・基礎学習」「基本学習」「応用・個性化学習」と、身につけさせる学力と学習段階(ステップ)を明示したことで、「応用学習」での「ありがとうスピーチ」に生かしたい「基本」を焦点化し、効果的に学習することができた。

また、「応用・個性化学習」から「発信・交流学习」への2段階によって、スピーチの内容を充実させることができ、発信の場面における子どもたちは、音声面だけでなく内容にも意識を向けられるようになっていた。また、①自分の考えをしっかりとらううえで、②自分から積極的に発信して他者とコミュニケーションする、というコミュニケーションの基本的な態度の形成も進めることができた。

さらに、単元の最後に「評価・一般化学習」を位置づけることで、「メタ評価能力」を高めながら、学習内容を他者の理解と効果的な表現技術の習得という「生きる力」へと高めることができた。

(3)教材の価値と子どもたちの変化

この学習のあと、それまでテレビゲームや野球などの遊びのことにしか頭になかった一部の児童たちに変化が見られた。七夕の飾り付けのために、学級で短冊を作らせたところ、「家族みんなが健康でいられますように」という願いごとを書く男子児童が何名も表れたのである。

彼らのスピーチのテーマは「友人」「野球」だったが、物語教材「ずうっと ずっと 大すきだよ」と出会い、「ありがとうスピーチ」発表会へと学習が進むなかで、心の中では、大切な人に対する気持ちを言葉に表すことの意味と大切さに気づいたものと思われる。「感謝」や「共感」を素直に表現できるようになったわけであり、コミュニケーションの基本的な態度を養えたという点で、今回の教材は有効であったと言えることができる。

7. おわりに

今回使用した物語教材「ずうっと ずっと 大すきだよ」は、小学校1年用教材として教科書に位置づけられているが、実践では小学校3年に使用した。

その理由は、物語教材としての「学び方・評価」リテラシーを踏まえた上で、豊かなコミュニケーション学習に生かせる特性が、小学校3年にも十分に（3年生以上の方がより効果的に）生かしうると判断したためである。例えば、「ほく」が愛犬エルフとの関わりとエルフの死を通して、自分の行為によって他者が幸福になれることを自分の幸福として喜べるようになるというくほくの成長／人物の変化＝物語の理解技術）、そして、「ほく」は家族とは違ってエルフに「ずうっとずっと大すきだよ」と言い続けてきたことからわかるく言葉で伝えることの大切さ／コミュニケーションが関係を創る点等である。

国語科の「到達目標（評価基準）」とその系統性が明確であればこそ、物語教材をもこのような形で「話す・聞く」「関わる」といったコミュニケーション学習に焦点化することが可能となる。

本実践での「ありがとうスピーチ」という学習活動は、徳目的な社会性を狭く限定して強要するものではなく、「確かな学力」の育成が「豊かな人間性・社会性の育成」にリンクするような「授業・評価システム」の一例である。

以上、本稿は到達目標（評価基準）を明確にしたコミュニケーション学習と評価研究の一環として、文学教材（ここでは物語教材）をく情報理解から発信の一モデルとしてとらえなおし、「話す・聞く／関わり

学び合う」というスピーチの交流と評価学習へと結びつけた実践的な提案である。

〈付記〉

本稿は、伊藤による第66回国語教育全国大会（日本国語教育学会主催、2003年8月11日～12日、青山学院大学）での発表内容を補筆・修正したものである。

分科会当日には、助言者の堀江祐爾先生（兵庫教育大学教授）、甲斐雄一郎先生（筑波大学助教授）から好意的なご批評とご指導をいただいた。また、本実践にあたっては、本校教諭の瀧平涼子氏のご協力を得た。記して御礼申し上げる。

なお、紙面の制約上、児童のスピーチ原稿やスピーチ資料としての絵、作成した学習シートの細部に関する詳細と考察は省略したことをお断りする。

〈注記〉

佐藤洋一「〈段階〉を踏まえた授業構想—「情報」リテラシーと発信型の学習過程— [連載／総合的学習を支える国語科の基礎・基本、第4回]」（『教育科学国語教育 平成13年7月号』明治図書）

〈主な参考文献〉

- 1, 連載「到達目標（評価基準）としての『言語技術』」佐藤洋一著（明治図書、『教育科学国語教育 2003年4月号～2004年3月号』）
- 2, 『実践・国語科から展開するメディア・リテラシー教育』佐藤洋一編著（明治図書、2002年9月）
- 3, 『国語科を核に総合的学習を創る』佐藤洋一編著（明治図書、2000年4月）
- 4, 『音声言語指導ハンドブック』相澤秀夫・高木展郎・佐藤洋一編著（東京法令、1996年5月）
- 5, 『国語教育研究大辞典』国語教育研究所編（明治図書、1988年）等